

教え子物語

三好京三



The background of the entire page is a soft, painterly illustration. It depicts a young girl with dark hair, wearing a white dress and a matching hat, standing in a field. She is surrounded by large, white, lily-like flowers with prominent stamens. The overall color palette is warm and muted, with shades of cream, light pink, and pale yellow, giving it a nostalgic and gentle feel.

教之子物語

おしごものがたり
教え子物語

昭和五十九年八月十五日 第一刷

定 価 一〇〇〇円

著 者 三 好 京 三

発 行 者 西 永 達 夫

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表(〇三)二六五―一二二一

印 刷 凸 版 印 刷

製 本 加 藤 製 本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

© Kyozo Miyoshi 1984

Printed in Japan

目次

教え子物語

7

第一話

十円紙幣

9

第二話

海冥^{かいめい}

43

第三話

タンゴをありがとう

63

第四話

雪およぎ

103

第五話

黒い蜘蛛^{くも}

135

山峡の赤い空

163

節分の夜

199

四組目の親

223

雨脚

245

装画

深沢紅子

「百合の庭」

教え子物語

教え子物語

海辺の学校で山の分校で、そして町の学校で、わたしは多くの子どもらと出会い、別れた。

遅れた子はおいつく。

つまずいた子は立ち直る。

懸命だったあの子らは今どうしているだろう。

時の扉をおし、子どもらの顔が今、あざやかによみがえってくる。

第一話 十円紙幣

一

いたましい思いがした。いいではないか、見逃してやれ、と思っている。たかだか十円のことである。机の上に放り出していた美千子先生の方が悪い。しかし、首席教員は、「大掃除が終わったら、各学級共、犯人探しの会を開き、みつかり次第教員室に連れてくるように」と言っていた。

昨日は運動会であった。無人になった職員室には、誰もが自由に出入りできる。もしかすると、父兄も入ったかも知れない。だから、美千子先生の十円が紛失したとしても、必ずしも生徒が盗ったとは限らない。運動会の翌日は、後片づけ、大掃除、そのあと学級毎の反省会と、予定が組まれていた。しかし、盗難事件が発生したので、反省会はあつまわしにされ

ることになる。

盗んだ子は、どきどきしているだろうと、小倉良一は思った。小倉は四月に県南の内陸部の町から県北の海辺の小学校に助教諭として赴任したばかりである。十八歳であった。昭和二十五年、このころは教師が不足で、高校卒の無資格教員がまだ採用されていた。

——ただかか十円——

小倉の月給は三千七百七十二円である。自分の月給から出してやってもかまわない。

「たった十円と思ってはいけませんよ」

ちょび髭を生やした校長が、若い小倉の気持を見すかしたように言った。

「人のものに手を出すという精神がいけない。徹底的に洗ってください。盗癖のある子は、放つて置くとたいへんなことになります」

「一年生では無なごんす」

髪をひつつめにした、五十五歳になる女教員が言った。

「一年生はそんな大金には手を出さなごんす。それに、一年生は職員室には入りあんせん。きつと、高学年でござんす」

「それでも一応調べてください」

と首席教員は言った。当時、教頭の制度はまだなくて、校長を補佐する役は首席教員であった。

「そりゃあ調べあんすども……」

老女教員は不満げである。尻馬に乗るように、当の美千子先生が、

「二年生でもありません。わたしは児童係ですから、ずっとそばについていました。二年生も職員室には入りません」

と言った。眼の細い丸まっつい顔であるが、背が高くて肉づきがよく、どこやら色気がある。ちょび髭の校長は、この美千子先生に気があると、同僚の中には言う者がある。たしかに、美千子先生の金がなくなったのでことさらに仰々しく職員朝会を長びかしているのかも知れない。

「いや、高学年が疑われているようであんすが、俺の組にも教師の金を盗むような人間はありあせん。俺の組はいつも徹底的に締めていあんすから」

六年生担任の、顎の張った獅子鼻の男教員が言った。

「とにかく、全クラス、調査してほしいということですよ」

首席はいらだっている。小倉は、どうもこのようなことは、教育とはいえない気がしている。子どもたちに、「先生のお金が机の上から消えた。盗まれたのかも知れない。みなさんは、ぜったい人のものを盗んではいけませんよ」と注意するだけではいけないのであろうか。もし、盗んだ子どもがいるとして、それは一人である。一人のために予定を変更し全校五百人の児童を調べるといふのはいかにも大袈裟だ。

「調べかたがわかりません」

とうとう小倉も口を開いた。

「ぼくは刑事じゃないから」

とたんに校長が眼のふちを赤らめ、顎をがくんと前につき出した。興奮したときの表情で

あった。

「何ですか、刑事でないとは。盗難があったら、徹底的に調べて、盗んだ子を指導するのが教師の任務じゃないか」

「だから、その調べ方がわからないんですよ。ほんとうにわからないんです。どうすればいいんですか」

「そんなことは自分で考えればいい」

「考えるのも無意味な気がするんですがね。いったい、これが教育ですか」

校長の逆上が滑稽に思われ、少々生意気だとは思ったが反抗してみせた。

掃除が終わってから、小倉は受け持ちの四年二組の子どもたちに運動会の作文を書かせ、隣の四年一組の教室に入った。一組の担任はやはり助教諭であったが、五年の教職経験を持つ男性であった。校長は、口論のあと、その村崎という教師から、犯人探しの見本を見せてもらうよう指示したのだ。

村崎は小柄で坊主頭であった。後輩の小倉に見られていると思うからか、やや気取って、「これから十円を盗んだ者の調査を始めます」

と言った。

「盗んだ者は、見つけられる前に先生に言いなさい。自白しないであとで見つかり、罪が重くなります」

子どもたちは、自分が疑われているのではないかとおびえた眼で、受け持ちの教師の顔を

まじまじと見た。

「ありませんか。ありませんね。それでは眼をつむってください。先生は、それを見ると、誰が盗んだかわかります。はい、つむって」

子どもたちは一斉に眼をつむった。村崎は教壇から降り、わざとゆっくり足音をたてながら、机の間をまわった。そしてときおり腰をかがめて子どもの顔をうかがい見た。怪しいと思われる子をそうしているらしかった。巡視を終わり、教壇に立って、村崎は、

「わかりました」

と言った。しかし、表情はそう確信にあふれているようではなかった。

「わかったけれども、これから持ち物検査をします。そのつぎは服装検査です。それでも出なかったら、パンツもぬいでもらいます」

へえ、と不満な叫び声があがった。

「不心得な人間がいるからそういうことになるのです。うらむなら盗んだ人間をうらみなさい」

村崎は子どもたちの反応にはかまわず、杓子定規にことを進めて行くつもりのもうであつた。

「机のふたをあけなさい」

子どもたちが机をガタガタいわせているとき、小倉は、

「ほんとうにパンツもぬがせるんですか？」

と訊いた。

「ええ、やります。女の子がズロースの中にかくしていたことがあるんです」

「それでもみつからなかったら」

「捜査は終わりです」

「わかりました」

小倉は四年一組の教室を出た。教わらなければならぬことを教わったという感想はなかった。小倉が求めていたのは、いかにも教師らしい、愛情と気づかいに満ちた方法であった。一組の教師のやっていたことは、警察でもそのようなことはやらないだろうと思われる、子どもを侮辱する脅迫的きようはくなやりかたではないか。空しい思いがした。このようなことは切り捨て、子どもたちと、熱気あふれるのような交流がしたい。

自分の教室に入ると、子どもたちはみな静かに作文を書いていた。ときおり頭をもたげ、ちらと小倉を見てから、思案にくれたように頬づえをついて外を眺める子もある。

——この子たちの中に犯人がいるはずはない——

職員朝会で息まいた教師たちのように、小倉も担任の子にそのような悪きをする者があるとは思われなかった。トモエ、クニ、フク、ハツ、安喜夫、清一郎、末男、勝雄……。お転婆だったり腕白だったりはするが、みなあどけない、純真な子どもばかりだ。

「作文やめ」

と小倉は声をかけた。怪訝けげんそうに子どもたちは顔を上げた。ほっと溜息をついた子もある。

「あの……」

小倉は口ごもった。自分にも、すぐれた取調べの方法があるわけではない。